
他殺的海外旅行

ロツツカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

他殺的海外旅行

【Nコード】

N0996Q

【作者名】

ロツツカ

【あらすじ】

ミステリーではありません。よく分からない話。

どうやら、此処は日本という国のようだ。未だに何が起こったか理解しきれていないが、街中に少しだけある読める文章を見た限りでは、そうだと思う。

何故私が此処にいるのかは分からない。私に関してはいつものように修道服を着て、髪型もいつもと同じで、体調もそんなに悪くなくて、なんとなく自分の足が透けて見える以外は普段と何ら変わりはない。

大して私の周りの方も、私がいるからといって驚いた様子も見せない。普段あまり見かけないような顔の人ばかりだけれど、きつと彼らにとつてはこれが日常なんだろう。だから、私がおかしいのか彼らがおかしいのか判断はできなかった。

一時間ほど歩いてきて分かったのだが、この国の人達は少し余所に冷たいのだろうか。先程から誰に声をかけても聞いてもらえず、道を聞こうにもどうにもならない状態だ。ましてや自分が此処にいる理由なんて、言葉が通じても分かるはずはないだろう。

少し休みたいと思い、公園に立ち寄る。日差しも暖かな昼間。遊んでいる子供がぼつりぼつりという。あとはその親らしい人と、仕事中なのかスーツ姿の人くらい。丁度空いているベンチがあったので、そこに失礼して座らせてもらった。

これから何をすればいいんだろうか。少なくとも記憶喪失という事ではなさそうだ。自分の名前も出身地も家族も思い出も、ちゃんと覚えている。せめてイギリスに帰りたいところだ。それと、足が透けている理由も解明したい。ただの気のせいかな、とも思っけれど。

お金は持っているけれど、飛行機のチケットを買えるほどもない。そもそもパスポートもないし、果たして自分の持っているお金がこ

の国で使えるかどうかさえ分らない。パスポート無しにどうやって此処に来たんだろうと思う。しかし、切り取られたように此処に来るまでの記憶が全くなかった。

どうしようもなく途方に暮れていたところに、一人の男性がやってきた。色素の薄い髪に、暗い黒の目をしている。結構暖かいと思うのだが、彼はマフラーにコートという嚴重装備をきていた。何より目についたのが、頭に飾つてあるのが取りつけてあるのか、大きなナイフとフォークがあつた。更に、頭の後ろの方には黒いもやのようなものがかかつていて、よく見る事ができない。とにかくにも、変な人。これは日本という国の流行りなのだろうか。

彼は私の事をじつと見つめたかと思うと、何かを囁んでいた口を止めた。

「隣、いいですか」

流暢な英語でそう言う。とつさに頷いてベンチの端に寄り、空いた所に彼が座つた。この人、言葉が通じるらしい。そうとなればまたとない機会だ。迷惑がられるかもしれないが、聞いてみるしかなかった。

「あのっ」

「事故死、と見せかけた殺人」

私が振り向き声をかけたとはほぼ同時に、彼は私を指さして何気なく言つた。新聞でも読んでいたのかとも思ったが、彼の手には何もない。

彼は続けて言つた。

「君の死因。死後一週間みたいだね、お疲れ様」

そう言つたかと思えば、満足したのか彼はどこか違う方向を見た。世間話をしたような調子で、足をぶらつかせながらぼけつとしている。

「……占いか何かですか？」

「そう信じたいならそれでもいいよ、シスターさん」

「信じたいなら……？」

「気付いていないのかい？ 君は死んだんだ。足が透けているのがその証拠だよ。足から段々透けていって、全部消えたら成仏完了。それまで楽しんでね、シスターさん」

彼は面倒くさそうに口を動かし、溜息をつくように息を吐いた。時折彼は眠そうに何度も瞬きをしている。

私が死んだなんてそんな事を急に言われても、信じると言われても信じられない。確かに足は透けて見えるが、私の意識は確かにここにある。大体、今いるのは私の暮らしていた場所だから確認もできない。あそこで死んだんならあそこで目覚めるはずだ。辻褄が合わないじゃないか。

そのような事をひとしきり彼に、なるべく丁寧に伝えた。が、彼は顔をしかめてどうしようもなさそうに唸る。

「そんな事を言われても僕は知らないよ。君が此処にいるっていう結果しか僕は知らないから。僕は解決方法を知ってる訳じゃない」

彼は言った後に大きく欠伸をした。不思議な事に、彼の頭についているナイフとフォークは動いても落ちる様子はない。相変わらず彼の後ろにはもやがかかったままで、寧ろ死んでいるのは彼の方なのではないかとも思えるくらいだ。

「聞いていいですか？」

「何？」

「その……貴方も、濁っているというか、何だかもやがかかっていると思うんですが、もしかして……」

その質問をした途端、彼は目をぱちくりさせた。何か変な事を言っただろうか。珍しいものを見る目で私を見つめた後、だるそうな笑みを浮かべる。

「そうか。幽霊は普通の人間じゃないから見えるんだね」

「あなたは誰なんですか？ 普通の人間なんですか？」

「僕が普通の人間だと思うかい？」

煙草も吸っていないのに黒ずんだ息を吐きながら、彼は言った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0996q/>

他殺的海外旅行

2011年1月11日18時25分発行